

スマホで訃報連絡&思い出写真を共有 遺族も友人も心を込めたお別れができる 「おもいでシェア」

見たことのなかった生前の笑顔が遺族の心をほかばかと温める。

『おもいでシェア』はスマートフォン、そしてSNSやLINEという社会の新しいインフラを使って訃報を送り、故人との思い出の写真やメッセージを共有できるサイト。故人の親戚・友人らに必要情報を迅速・確実に連絡するとともに、それぞれスマートフォン内に保存している思い出の写真をシェアできる。また弔電よりも心のこもったメッセージを送れる。シンプルな機能で操作方法も簡単だ。

総務省の統計によれば、スマートフォンの利用率は50代で92%、60代で74%。遺族や友人間でさらに情報を広めることができる。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、今後、さらに直葬や家族葬の増加が予想されるが、『おもいでシェア』を用いれば、実際の葬儀に参加しない人も、思い出の写真やメッセージを遺族とシェアすることで心を込めたお別れができる。

菱熱工業株式会社 (東京都)

訃報連絡

時代に合った訃報のお知らせ、 惜別のメッセージ

遺族にとって葬儀の際の困りごとのトップは「関係者への訃報連絡」。現在、遺族の6割ほどが電話で訃報を伝えているが、突然のできごとに気が動転し、限られた時間の中、従来のように電話で1軒ずつ連絡することは大変な負担になる。

『おもいでシェア』でスマートフォンからSNSやLINEでメッセージを送付すれば、時間を選んだり相手のタイミングに合わせたりする必要はない。また、言い間違いや聞き間違い、伝え漏れもなく、必要な情報を正確に伝えることができる。

思い出の写真を共有

遺族のグリーフケア、 それぞれの関係者の満足にも

今や、故人との思い出の写真は、大半がスマートフォンに保存されている。親戚であれば、お盆やお正月に集まった際の記念写真。友人であれば同窓会や習い事、趣味やスポーツなどでの場面。職場関係であれば仕事での、あるいは会社の行事・社員旅行などでの一枚など。『おもいでシェア』で遺族がこうした写真を見られることにはグリーフケアの効果がある。

「この人の人生にはこんな時間があったんだ」「こんなことをして楽しんでいたんだ」「なんて生き生きとした表情をしているの」——それまで知らなかった故人の一面と出会うことは、大切な人を失った遺族に驚きや感慨、そして癒しをもたらす。また、それと同時に大勢の関係者が葬儀への参加に代わる遺族への貢献、満足感を抱くことができる。そういう意味では、「おもいでシェア」の利用は、新しい葬儀のかたちを提供することにつながる。



写真を共有することで故人の生きた時間を分かち合える (青野氏提供)

開発者の思い

遺体保管庫開発を基点に葬儀業界に参入開発した菱熱工業株式会社(東京都大田区/代表取締役社長:近藤貢)は、空調衛生設備等のエンジニアリング・コンサルティング・設計・製造などを行っている。その技術を生かして昨年9月、葬祭業界や老人ホーム・介護施設などのニーズに応えた遺体保管庫『ラステクト』を開発・販売。新設計で遺体の乾燥を防ぎ、外装に木目調、大理石調などのシートを採用した同製品には、遺族にとって大切な人との最後の時間を少しでも温かいものにするために—という思いが込められている。

ラステクトを導入した葬儀社と懇意になったプロデューサーの青野尚之氏は、この「温かいお別れづくり」にこだわり、今後の葬儀業界全体の役に立つサービスを作りたいと『おもいでシェア』開発に取り組んだ。

「葬儀社、遺族、葬儀に参加できない友達。どうしたら皆が心の満足・納得を得られるかを考えて生まれたものです」

「おもいでシェア」は全国の葬儀社を対象に、生前相談などでのプレゼンテーションを通してサービスの普及を図っていくという。月額利用料3万円(消



費税別)から。ウェブ葬儀(ライブ配信)や香典のキャッシュレス化の機能も搭載できるよう現在、開発を進めている。

【スマホサンプルサイト】

https://omoide-share.com/svstem/trad/sp/?contest_pk=9

【問い合わせ】菱熱工業株式会社

担当:プラントドメイン 青野、池上

TEL:03-3778-2118

FAX:03-3778-2119

page 4 寺院などの取り組み事例

臨済宗青年僧の会 主催 オンライン坐禅会 「おうち坐禅」から潜在的需要を発掘

宗教者の挑戦

新型コロナウイルス感染拡大防止のための外出自粛の長期化によって、お安やネットのほけ口が見つかず、精神の問題を抱える人が増えているのは、葬儀などの葬儀やRQの案件も増えてい

こうした状況の中、宗教者として備わることができる、ITを活用して対策に乗り出す寺院も数多く見られ、自宅での安心のため写真や写仏が撮れるようにと寺院の公式ページでオンラインロードショーをしたり、伏話をオンラインで配信したりと、取り組みが行われている。